

聖書箇所：ルカの福音書2章25～35節

説教題：腕に抱かれる神

1 シメオン

(1) 正しい人

これまで三回にわたって旧約聖書から救い主を待ち望んでいた信仰の大先輩たちの姿を見て参りました。きょうはその最終回で、シメオンという人物に焦点を当てていきます。

シメオンは「正しい、敬虔な人」であったと書かれています。皆さんは「正しい人」と聞いてどんな人を想像するでしょうか。何をしても、間違ったことはひとつもしたことがない。何かを語ってもいつも正しいことを口にする人。性格は几帳面で、部屋に入ればゴミ一つ落ちていない。でも、もしそんな人が実際に私たちのそばにいたらどう思います？ちょっと優等生過ぎて窮屈で息が詰まってしまうかもしれません。

聖書で、正しい人と呼ばれるとき、それはどんな意味なのでしょう。実は、間違ったことはしない、という意味ではありません。シメオンが自分がもうすぐ死ぬことを告白するような場面が29節に出て来ますが、そこを見ていただきたい。聖書によれば、すべての人間は生まれながらに罪人であり、その結果、すべての人間は死ぬ者となってしまったと書かれています。シメオンもやがて死にます。ということは、シメオンも神の目から見れば罪人のひとりに過ぎないのです。

罪人は、そもそも正しいことをしたいと願ってもできない存在です。それなのになぜ「正しい人」と呼ばれるのでしょうか。奇妙に

聞こえるかもしれませんが、自分は正しいことができないのですと、隠さずに、正直に告白する者を正しい人と呼ぶのです。シメオンはそのような人でした。

しかしそれだけで「正しい人」と呼ばれたわけではありません。もう一つ理由があります。

シメオンは「イスラエルの慰められることを待ち望んでいた」とあります。イスラエルというのは、シメオンが住んでいた国の名前であり、同時にイスラエル民族という自分たちの国籍のことも指すことばです。

たとえば、何か困ったことが起きたら皆さんは心の中でこんなことを思うでしょう。

「神様、私のことを助けてください。」自分が困っているのですから、助けてもらいたいのはこの私です。周りに困っている人がいても、そのひとのために「あの人も助けてください」とはなかなかそこまでは思う余裕がない。それが普通でしょう。

シメオンが違うのはその点です。シメオンは自分は罪人だと告白しました。けれども、自分だけが助かれれば良いとは思わなかった。この国に住む人たちもみな自分と同じく罪人として苦しんでいる。だからこの人たちも助けて欲しい。自分だけ助かったとしても何も嬉しくはない。みながいっしょに助けられて、初めて自分の喜びでもあるのだと考えました。神はそれをご覧になり、シメオンを「正しい人」と呼びました。

ああ、そうか。シメオンは情け深い人だったんだね。そんな結論で終わりそうですが、忘れてはならないことが一つあります。

つまり、それはどういうことですか。「シメオン、おまえは正しい」と言っておしまいなのですか。そうではない。「シメオン、おまえは正しいことを願っている」と、神が言われたのであるのなら、神はシメオンの願いのとおりに行動されるということを言っているのです。

(2) キリストを見るまでは死を見ない

そんなシメオンは、「主のキリストを見るまでは決して死なない」とあらかじめ告げられていました。

この箇所の原文を直訳するとこうなります。「キリストを見るまでは、死を見ることはない。」これを一步進めれば、こう言い換えることもできる。「キリストを見る者は、死を見ることがない。」なぜそう言えるのでしょうか。その事はまた後で触れたいと思います。

シメオンは、両親の腕に抱かれて宮に入ってきた幼子イエスに出会います。この幼子こそ、神に遣わされてきた救い主キリストでした。お告げのとおりになりました。

そしてこんなことを言います。「主よ。今こそあなたは、あなたのしもべを、みことばどおり、安らかに去らせてくださいます。私の目があなたの御救いを見たからです。」「去らせてくださいます。」「私はいつ死んでもかまいません。たとえ今日死ぬことになったとしても、私は思い残すことはない。心安らかに死ぬことができる。」こう言っている。でもシメオンはキリストを見たのですから、死を見ることはない。そのようになるはずではなかったのか。さっきこう言いました。「キリストを見る者は、死を見ることがない。」それなのにシメオンは自分の死を予感して

います。実際、シメオンは死にました。ということは「キリストを見る者は、死を見ることがない。」これは嘘ですか。

2 いつ死んでもよい

いいえ、嘘ではありません。ではどういうことか。それを考えてみましょう。

なぜシメオンがいつ死んでもいいと思ったのでしょうか。いろいろな可能性が考えられる。一つは、人生に絶望してしまったからか。そんなことはありません。彼は絶望したどころか、反対に希望がかなえられて一番の喜びの中にいます。

では、どういうことか。皆さんは、自分が死ぬことを考えたことがあるでしょうか。死ぬのは楽しいですか。楽しいと考える人はまずいないはずです。死ぬのが怖い。多くの人がそう言います。死ぬことを考えないようにするために、楽しいことばかり考えてる。そんな方もいます。

どうして死ぬのが怖いのでしょうか。死んだら大好きな人にもう会えないから。死んだらどこに行くかわからないから。死んだら自分が消えてなくなるから。死んだら楽しいことをすることができないから。いろいろあります。

でもシメオンは、いつ死んでもいいと言えた。なぜでしょう。救い主キリストを見たから。救い主キリストを見ただけで、なぜいつ死んでもいいと言えたのか。

救い主と呼ばれる方は、いったい私たちを何から救ってくれるのでしょうか。死から救う方。シメオンはそれがわかった。だからもう死ぬのが怖くない。というのは、たとえ今死ぬことがあっても、救い主が死から自分を救ってくださるから。それがわかったのです。

なぜわかったのでしょうか。

シメオンは「主のキリストを見る」ということは告げられていました。しかしキリストと呼ばれる方がどんな姿で来られるのかは教えられていません。それが今目の前に来てくださった。どんな姿ですか。幼子の姿です。まさかと思いました。驚きました。神である方がまさかこのようなお姿になられてくるとはまったく考えもしなかった。

神が小さくなられたのです。神が人間の中でも最も小さくて弱い姿をとられました。その時、すべてを了解しました。神は本気で私たちを救おうとされている。だから、シメオンはいつこの地上のいのちが尽きようともまったく平安であるとの告白ができました。

3 キリスト

そのシメオンは、幼子を腕に抱きながら母マリヤにこう語ります。「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人が倒れ、また、立ち上がるために定められ、また、反対を受ける印として定められています。剣があなたの心さえも刺し貫くでしょう。それは多くの人の心の思いが現れるためです。」

「多くの人が倒れ、また立ち上がるために定められている。」この意味については、研究者の間でも確かなことはわからないのだそうです。でも少なくとも、この幼子イエスがやがて大きくなったとき、大変なことになるということは伝わってきます。イエスに対し、ことごとく反対する者が現れてくる。母マリヤはそれを見て、自分の心が剣で刺されるかのようなつらい思いをすることになるだろう。シメオンはそのように預言します。

私たちはシメオンが語ったことが事実であったことを知っています。イエスはやがて

人々に憎まれ、怒りをぶつけられ、ののしられ、つばをかけられ、むちで打たれ、罪のない方なのに罪を着せられ、十字架で処刑されました。母マリヤは十字架のそばにいて、イエスが死に、墓に葬られていくまでの一部始終を見ることになりました。

救い主として来られた方が、十字架で死んでしまったのです。でも先ほど言わなかったのでしょうか。救い主キリストは死に打ち勝った方。だからシメオンは、自分はいつ死んでもいいと言えた。それが十字架で死んでしまった、なんだ救い主でも何でもなかった。シメオンはだまされたのか。

4 腕に抱かれる神

でも、もし本当にこの方が救い主であるというのなら、どうならなければならないのですか。結論は一つしかありません。この方がたとえ死んだとしても、死んで終わりには決してならない。聖書に何と書いてあるか。確かにこの方は三日の後に死からよみがえられた。まさかと思いませんか。でも、もしその事がなかったのなら、私たちはむなしいものを信じていることになる。パウロは言っています。私たちにとってそれくらい大切な出来事なのだと言っています。

なぜシメオンが「いつ死んでもいい。たとえ今日死ぬことになったとしても、心は平安だ」と言えたのか、これでおわかりでしょう。

彼はイスラエルが慰められることを願っていました。「慰める」というのは、「かわいそうですね」とことばをかけておしまい、そんな軽いことばではありません。徹底的なのです。たとえば、愛する者をなくして悲しんでいる者を神は慰めてくださる。そのように言います。神はどのようにして慰めるので

しょう。愛する者を死から取り戻してくださる。それが神の慰めです。シメオンは神はそこまでしてくださるとわかりました。だから「いつ死んでもよい」と告白することができました。

今シメオンは、救い主を腕に抱いております。別の言い方をすれば、今救い主である方はシメオンの腕にだかれていることとなります。この方は神です。神である方が、シメオンの腕にご自分をゆだねておられます。この方はご自分で好きなおところにいけません。多くの人たちの世話にならなければ生きていくことができません。神である方なのに、地上で最も弱いお姿になられます。

不思議でしょうか。これが私たちの神です。これが私たちの救い主です。腕に抱かれる神。それほどまでに私たちを信頼し、ご自分をゆだねようとされる。

神の御救いのすばらしさを覚え、御名をあがめたいと願います。